

真実を知ってください

鎮痛剤乱用

ペルクス

ジューズ

デハース

チルビリー
ヘロイン

drugfreeworld.org

この小冊子が 制作された理由

街 中や学校、あるいはインターネットやテレビの中で、薬物についてのさまざまな情報が氾濫しています。その中には正しい情報もありますが、そうでないものもあります。

そうした薬物情報の多くは、売人によって広められたものです。今では更生したかつての売人は「薬物を買ってもらうためなら、どんな嘘でも言っていた」と証言しています。

そのような情報にだまされないでください。薬物乱用という罠を避けるためには、事実を知る必要があります。この小冊子はそのために制作されたものです。

この小冊子をお読みになった上で、皆様のご意見やご感想をウェブサイト **drugfreeworld.org** から、またはEメール **info@drugfreeworld.org** までお寄せください。



処方鎮痛剤の乱用

アメリカ合衆国では、多くのストリート・ドラッグの使用がわずかに減少傾向にある一方で、処方薬の乱用は増加しています。2007年には、初めてマリファナを使用した人が210万人だったのに対し、初めて処方薬を乱用した人は250万人に上りました。

十代の若者の間で、処方薬はマリファナに次いで最も広く乱用されている薬物です。また、処方薬を乱用している十代のほぼ半数が鎮痛剤を取っています。

なぜ、これほど多くの若者が処方薬の乱用に走るのでしょうか？

調査によると、十代の若者のほぼ半数が、処方薬を取することは違法なストリート・ドラッグを取るよりもずっと安全だと信じています。

ほとんどの若者は、こうした極めて強力な、精神に作用する薬物を取ることの危険性を知りません。長期間にわたって鎮痛剤を使用すると依存症になる可能性があります。医療目的でこうした薬を処方されている人さえ、やがて薬物の乱用・常習という罠に陥ってしまうことがあります。

鎮痛剤の危険性は、表面化した時には既に手遅れになっている場合もあります。たとえば、2007年にはフェンタニールという鎮痛剤の乱用によって、1000人以上が死亡しました。この薬物はヘロインの30～50倍も強力であることが判明しました。

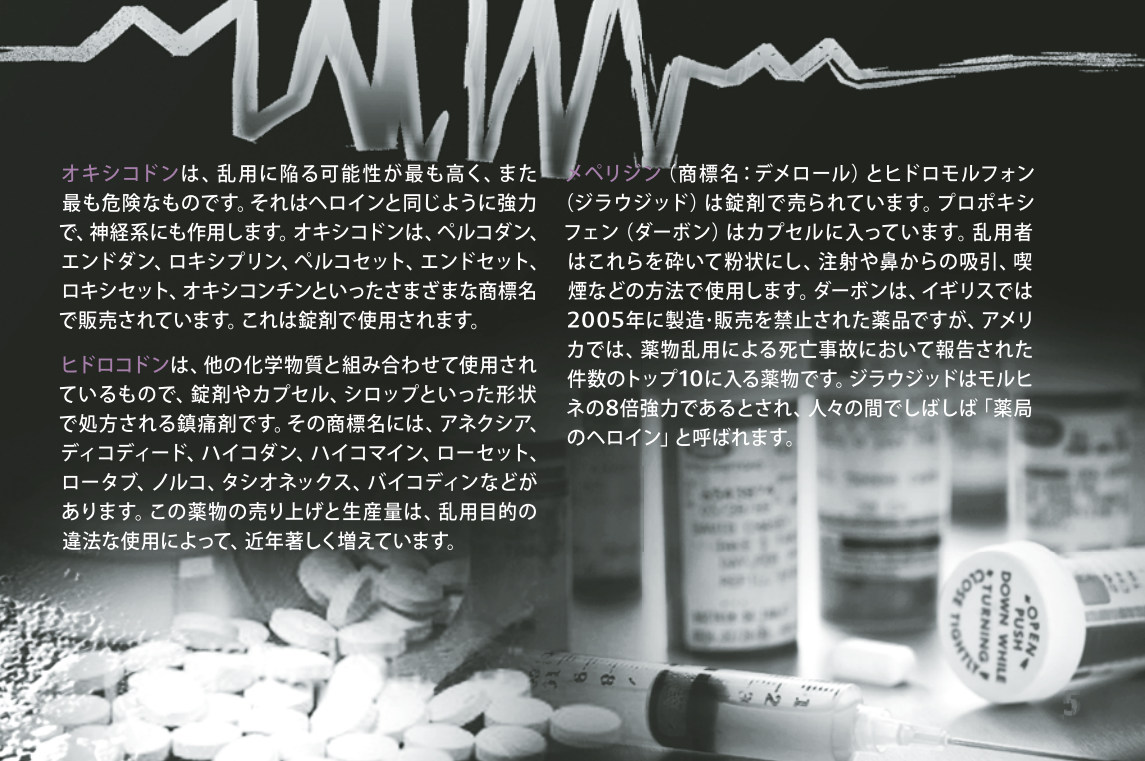


鎮痛剤とは？

鎮 痛剤（処方薬）は、神経系の中で私たちが「痛み」として知覚する信号の伝達を妨害する強力な薬物です。ほとんどの鎮痛剤は、同時に脳内の快楽に関わる部分を刺激します。こうして痛みを遮断することに加え、それらは「ハイ」の状態を引き起こします。

最も強力な鎮痛剤は、オピオイドと呼ばれるアヘン*に似た化合物です。オピオイドは、アヘンから生成された薬物（ヘロインなど）と同じような反応を神経系にもたらすように作られています。オピオイド系の鎮痛剤の中で最もよく乱用されているのは、オキシコドン、ヒドロコドン、メペリジン、ヒドロモルフォン、プロボキシフェンです。

* アヘン：ケシの実から抽出される、茶色の粘着性のある物質。



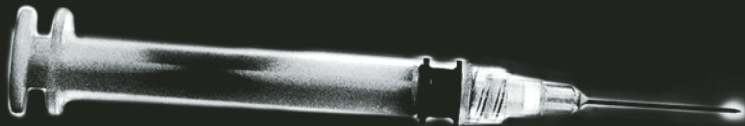
オキシコドン[®]は、乱用に陥る可能性が最も高く、また最も危険なものです。それはヘロインと同じように強力で、神経系にも作用します。オキシコドンは、ペルコダン、エンドダン、ロキシプリン、ペルコセット、エンドセット、ロキシセット、オキシコンチンといったさまざまな商標名で販売されています。これは錠剤で使用されます。

ヒドロコドン[®]は、他の化学物質と組み合わせて使用されているもので、錠剤やカプセル、シロップといった形状で処方される鎮痛剤です。その商標名には、アネクシア、ディコディード、ハイコダン、ハイコマイン、ローセット、ロータブ、ノルコ、タシオネックス、バイコディンなどがあります。この薬物の売り上げと生産量は、乱用目的の違法な使用によって、近年著しく増えています。

メペリジン[®]（商標名：デメロール）とヒドロモルフォン（ジラウジッド）は錠剤で売られています。プロポキシフェン（ダーボン）はカプセルに入っています。乱用者はこれらを砕いて粉状にし、注射や鼻からの吸引、喫煙などの方法で使用します。ダーボンは、イギリスでは2005年に製造・販売を禁止された薬品ですが、アメリカでは、薬物乱用による死亡事故において報告された件数のトップ10に入る薬物です。ジラウジッドはモルヒネの8倍強力であるとされ、人々の間でしばしば「薬局のヘロイン」と呼ばれます。

「20歳の時、外科手術後に処方された薬をきっかけに、**麻酔薬***の中毒になりました。手術後の何週間かのうちに錠剤を乱用するようになり、薬の効き目がすぐに出るように、また飲み込んだり鼻から吸い込んだりできるように砕いて粉々にしていました。そうすることでヘロインを打つと同じ感じで**注射することもできるのです**。薬から離れることは、苦痛以外の何ものでもありませんでした。」

— ジェームズ



* 麻酔薬：中枢神経（脳と脊髄）に作用し、感覚を一時的に麻痺させる薬物。めまい、調整機能の低下、無意識などをもたらす可能性がある。

鎮痛剤の通称

一般名

オキシコドン

ヒドロコドン

プロポキシフェン

ヒドロモルフォン

メペリジン

商標名

オキシコンチン、ペルコダン、
ペルコセット、ロキシプリン、
ロキシセット、エンドダン、
エンドセット

アネクシア、ディコディード、
ハイコダン、ハイコマイン、
ローセット、ロータブ、ノルコ、
タシオネックス、バイコディン

ダーボン

ジラウジッド

デメロール

通称

オキシ80、オキシコットン、
オキシセット、
ヒルビリー・ヘロイン、
ペルクス、パークス

ペイン・キラー、バイクス、
ハイドロス

ピンクス、フットボールズ、ピンク・
フットボールズ、イエロー・フット
ボールズ、65's、Ns

ジュース、ディリース、
ドラッグストリート・ヘロイン

デミーズ、ペイン・キラー

なぜ鎮痛剤には 強い中毒性があるのか、その理由

オピオイド系の鎮痛剤はつかの間の多幸感をもたらしますが、同時にこうした薬には中毒性もあります。

鎮痛剤の長期の使用は身体的依存を引き起こします。身体は体内に存在する薬物に順応するため、急に薬物の摂取を止めると禁断症状が起こります。また、身体に

薬物に対する耐性ができることもあり、そうすると同様の作用を得るためには、さらに多くの分量を摂取しなければなりません。

あらゆる薬物と同様、鎮痛剤も単に痛みを覆い隠すだけです。それらは何も「治癒」しません。継続的に痛みを和らげようとする、と、摂取量はどんどん増えていき、

「私は処方された鎮痛剤の中毒となりました。」

初めて処方薬の鎮痛剤を取り始めたのは、何年か前に主治医が
脊髄手術の後の痛みを和らげるために鎮痛剤を処方した時でした。

ここ数年、私は鎮痛剤への依存を断とうとして、実際に2度、医療施設に入りました。
そしてつい最近、次の段階に移ることについて主治医と話し合ったところです。」

— ラジオ解説者のラッシュ・リンボーの番組内のコメントからの引用。
2003年10月10日 プレミア・ラジオ「ヒズ・ブロードキャスター」より。

命取りともなる鎮痛剤に抗議する人々。
リハビリテーションの専門家は、
オキシコンチンなどの
強力な鎮痛剤による中毒は、
あらゆる薬物の中でも
最も離脱が難しいと述べています。

ついには薬物なしでは1日も過ごせない状態になってしまします。

鎮痛剤の禁断症状には、情動不安、筋肉や関節の痛み、不眠、下痢、嘔吐、鳥肌を伴う強烈な悪寒（コールド・ターキー）、制御できない足の動きといったものがあります。

オピオイドの重大な危険性のひとつに、呼吸の抑制があります。大量に摂取すると呼吸のペースが落ちて、さらには停止を引き起こすことがあり、そうすると常用户者を死に至らしめます。



オキシコンチン

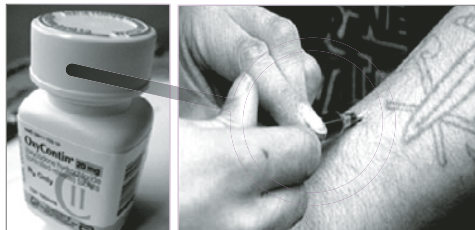
「山男のヘロイン」

オキシコドン系の薬物は、神経系にヘロインやアヘンに似た反応を起こします。そのためヘロインのような違法な麻薬の代用品または補助として、オキシコドン系鎮痛剤のひとつであるオキシコンチンを用いる乱用者がいます。

武装した強盗が薬局を襲う事件が起きましたが、その際に強盗が要求したのは現金ではなく、オキシコンチンだけでした。いくつかの地域（特に合衆国東部）では、オキシコンチンは捜査当局が最も警戒する薬物となっています。

オキシコンチンは、アメリカ東部にあるアパラチア山間地域に居住する人々によって乱用されているた

め、「ヒルビリー（アメリカ東部の山男）ヘロイン」として広く知られるようになり、アメリカ合衆国では犯罪にまつわる主要な問題のひとつとなっています。ある地域では、犯罪の8割がこの薬物への中毒に関与していると推定されています。



「自分が『ドラッグ』の問題を抱えているとは思っていませんでした。**その錠剤を薬局で買っていたんですから。**仕事にも影響しませんでした。朝は少し疲れを感じましたが、それだけでした。自分が問題を抱えていると気付いたのは、約40錠もの大量摂取をし、**気が付くと病院にいた時のことでした。**私は中毒を克服するために、4ヵ月診療所で過ごしました。」

— アレックス



「いつからか思い出せないほど長い間、
私は『ハイ』になったり落ち込んだりしていました。

ちょっとしたことですぐに腹を立てたり、

怒りが爆発したりし、全く理由もないのに

誰かを嫌ったりしていました。長い間、

私は自分が躁うつ病ではないかと思っていました。

自分を望ましくない感情から救うために、去年の

10月に薬を使い始めました。けれどもなんと、

それは状態を悪化させただけでした!

今では薬物中毒と感情の問題の両方に
対処しなければならなくなったのです。」

— トーマス

心理的および生理的な 鎮痛剤の作用

- 重度の便秘
- 吐き気
- 嘔吐
- めまい
- 錯乱状態
- 薬物中毒
- 無意識
- 呼吸抑制
- 心臓発作の危険が増す
- 昏睡状態
- 死



鎮痛剤： その歴史

麻 酔薬はもともとケシから抽出され、何千年もの間、娯楽と医療の両方に使用されてきました。アヘンに含まれる最も作用の強い物質は、ギリシャ神話の夢の神、モルフェウスにちなんで名付けられたモルヒネです。モルヒネは非常に強力な鎮痛剤ですが、極めて中毒性の高いものです。

16世紀には、アヘンチンキ（アルコール溶液に溶かしたアヘン）が鎮痛剤として使用されました。

モルヒネは、19世紀初めにアヘンから初めて純粋な形で抽出されました。モルヒネはアメリカ南北戦争中に鎮痛剤として広範囲に使用され、多くの軍人が薬物中毒になりました。

コデインはやや作用の弱い薬物で、これもアヘンに含まれている成分ですが、人工的に合成できる薬物です。1830年フランスでジャン・ピエール・ロビケによって

非常に中毒性の高い
麻酔薬はケシから
抽出され、何千年
もの間、娯楽と医療
の両方に使用されて
きました。



BAYER

PHARMACEUTICAL PRODUCTS.

We are now sending to Physicians through-
out the United States literature and sam-
ples of

ASPIRIN

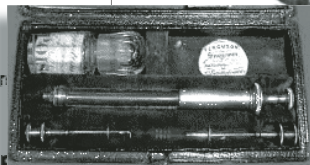
The substitute for the Salicylates, agree-
able of taste, free from unpleasant after-
effects.

HEROIN

The Sedative for Coughs,
HEROIN HYDROCHLORIDE
Its water-soluble salt.

You will have call for them. Get
a supply from your jobber.

Write for literature to
FARBENFABRIKEN OF ELBERFELD AG.
40 Stone Street, New York,
SMITHSONIAN BUILDING



モルヒネはアヘンに含まれる
最も作用の強い物質であり、
非常に強力な鎮痛剤です。
アメリカ南北戦争では多くの
軍人がこの薬物の中毒者と
なりました。





コデインの錠剤が入ったビン。あらゆる麻酔薬は一時的に痛みを和らげますが、その中毒性は極めて高いものです。

初めて分離され、アヘンの代わりに医療目的で用いられるようになりました。コデインは主に咳止め薬として使用されています。

19世紀前半、快楽を得る目的でアヘンを乱用する人が増え、1830年にイギリスではアヘンに依存している人が史上最高の数に達しました。1839年、中国がアヘン貿易を抑制しようとしたため、イギリスは中国沿岸に艦隊を送り、「第一次アヘン戦争」が始まりました。

1874年に、モルヒネより中毒性の弱いタイプの麻酔薬を研究していた化学者たちが、ヘロインを開発しました。しかし実際にはヘロインの作用はモルヒネの2倍も強力だったため、やがてヘロイン中毒は深刻な問題となりました。

1905年にアメリカ合衆国議会はアヘンを禁止し、その翌年には、すべての医薬品に関してその内容成分を表示することを義務付ける「純正食品薬事法」を制定しました。

メタドンは、1937年にドイツの化学者であるマックス・ボックミュールとグスタフ・エールハルトにより、IGファ

国際的な統計

アメリカ合衆国で、2007年に違法薬物を初めて使用した人々の間で最も多く使用されていたのは、マリファナと処方鎮痛剤でした。12歳以上の年齢層では、その数はほぼ同数です。医療目的以外での鎮痛剤の使用は12%増えています。

アメリカでは、高校3年生の1割が処方鎮痛剤を乱用していることを認めています。

鎮痛剤の乱用は、処方薬乱用に関する問題全体の4分の3を占めています。アメリカの規制医薬品の中で、医療以外の目的に転用され、乱用されているケースが最も多いのは、鎮痛剤のヒドロコドンです。

メタドンは、かつては薬物中毒の治療施設で使用されましたが、現在では医師により鎮痛剤として使用されて

います。2007年には、アメリカのフロリダ州だけで785人もの死亡事故を引き起こしたと見られています。

アメリカでは高齢者による処方薬乱用も急増しています。特に目立つのは、ザナックスなどの抗不安薬やオキシコンチンなどの鎮痛剤です。

イギリスでは、ソルパデインやニューロフェン・プラスといった鎮痛剤に依存している人が何万人もいると言われています。

医師やリハビリテーションの専門家は、鎮痛剤の乱用は最も治療が困難な中毒のひとつであると報告しています。

処方鎮痛剤への依存を示す危険信号

最もよく処方される鎮痛剤（オキシコンチン、バイコデイン、メタドン、ダルボセット、ロータブ、ローセット、ペルコセット）は、痛みを軽減すると同時に、使用者の身体に作用して、薬なしでは「普通」の状態を保つことさえできない、依存状態を引き起こす可能性があります。

人がこれらの薬物に依存している可能性を示す10の危険信号があります。

1. 使用量の増加：薬への耐性が増し、同じ効果を得るためにはさらに多くの量が必要になるため、結果として服用量が次第に増加していく。
2. 性格の変化：日常生活において、薬への欲求以外のことはすべて二の次になる。その結果として活力や雰囲気、集中力といった点に変化が起こる。
3. 引きこもり：家族や友人から離れ、自分の世界に閉じこもる。
4. 薬物使用の継続：鎮痛剤で処置していた症状が改善されたにもかかわらず、その後も同じ薬を取り続けている。
5. 処方薬の入手に大半の時間を費やす：薬を入手するために長距離を移動したり、複数の医者を訪れたりすることに多大な時間を費やしている。
6. 日常の習慣や身なりの変化：衛生意識の低下、睡眠や食事の習慣の変化、いつも咳き込んでいる、鼻水、充血して生気のない目など。
7. 責任を軽んじる：家事や請求書を省みない。学校や職場に病気で休むという電話を入れることが非常に多い。
8. 神経過敏：普通の光景や音、感情によって過度に刺激される。幻覚がある。
9. 一時的な記憶喪失、ひどい物忘れ：起こったことを覚えていない。一時的な記憶喪失を起こす。
10. 過剰な自己防衛：警戒心が強くなり、人からの何気ない質問に対して、自分の秘密がばれるのではと感じ、薬物に依存していることを隠そうとして過剰に反応するようになる。

薬物についての真実

薬物は基本的に毒です。その作用は、摂取する量によって決まります。

少し摂取すると、活動をより活発にする中枢神経刺激剤として作用します。多めに摂取すると、活動を抑制する鎮静剤として作用します。さらに多量に摂取すると毒となり命を奪います。

これはどの薬物にも当てはまります。こうした作用を引き起こすのに必要な量に違いがあるだけです。

それだけではなく、多くの薬物には人の心にも影響を及ぼす弊害があります。薬物を取っている人が自分の周囲で起きていることを知覚しても、それは歪んだものになってしまう可能性があります。その結果、その人の行動は奇妙だっ

たり、不合理であったりするかもしれません。暴力的になることもあるでしょう。

薬物はすべての感覚を遮断します。望ましい感覚も望ましくない感覚もです。そのため、短期的には痛みを和らげるために役に立ちますが、同時に人の能力や機敏さを消し去り、思考を不明瞭にします。

医薬品は、身体の働きを良くしようとして、何かを速めたり、遅くしたり、身体の働きを変えることを意図した薬物です。時には必要ですが、薬物であることに変わりはありません。中枢神経刺激剤や鎮静剤といった薬物を取り過ぎれば命を落とすこともあります。したがって、医薬品は規定通りに使用されない場合、違法薬物と同様に危険なものになります。

本当の解決策は、
事実を認識し、最初から
薬物など使用しないことです。



なぜ人は薬物を取るのでしょうか？

人が薬物を取る理由は、自分の人生を変えたいと思うからです。

若い世代の人たちが薬物を取る理由には、以下のものがあります。

- 周りとうまくやっていきたい。
- 問題から逃避するため。
- リラックスするため。
- 退屈を紛らわすため。
- 大人になったような気がするから。
- 反抗するため。
- どんなものか試してみたい。

こういった若者は、薬物が問題を解決してくれると思っているのです。しかし、結局のところ薬物は問題にしかありません。

自分の問題に直面することが困難なこともあるでしょう。しかし、薬物によって解決しようとしている問題よりも、薬物を使用した方が常に悪い結果を招きます。本当の解決策は、事実を認識し、最初から薬物など使用しないことです。



参考文献:

Drug Enforcement Administration
Fact Sheet on Prescription Drug
Abuse

“Older Americans fight drug abuse,”
3 Jul 2008, International Herald
Tribune

“Methadone rises as a painkiller
with big risks,” 17 Aug 2008,
International Herald Tribune

“Nurofen Plus to remain on sale,”
6 Aug 2008

“Warning on painkillers,” 5 April
2007, Financial Times

2007 National Survey on Drug
Use and Health, U.S. Substance
Abuse and Mental Health Services
Administration

“Depressants,” U.S. Department
of Health & Human Services and
SAMHSA’s National Clearinghouse
for Alcohol & Drug Information

ABC of drugs, channel4.com

A Brief History of Opium,
opioids.com

OxyContin Information, National
Clearinghouse on Alcohol and Drug
Information

OxyContin: Prescription Drug Abuse
Advisory, Center for Substance
Abuse Treatment (CSAT)

National Institute on Drug Abuse
(NIDA), Info Facts: Prescription Pain
and Other Medications

National Institute on Drug Abuse
Research Report, “Prescription
Drugs, Abuse and Addiction 2001”

“Some Commonly Prescribed
Medications: Use and
Consequences,” National Institute
on Drug Abuse

National Institute of Justice, Drug
and Alcohol Use and Related
Matters Among Arrestees, 2003

U.S. Office of National Drug Control
Policy, “Drug Facts: OxyContin,”
and “Prescription Drug Facts &
Figures”

“New Report Reveals More Than
1000 People Died in Illegal Fentanyl
Epidemic of 2005-2007,” Substance
Abuse and Mental Health Services
Administration

“Teen OTC & Prescription
Drug Abuse,”
teenoverthecounterdrugabuse.com

写真:9ページ:OxyABUSEskills.com/
protest;
14, 15ページ:AP Wideworld.

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズは、これまでに22の言語で出版され、世界中で何百万部も配布されてきました。新しいドラッグが次々と世の中に出回っており、その影響に関する新たな情報が知られるようになっていきます。本シリーズはそうした新しい情報を盛り込んだ最新版です。

これらの小冊子シリーズは、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスを拠点とする非営利の公益法人「薬物のない世界のための財団」によって出版されています。

財団は、その国際防止ネットワークを通して各種教育資料や助言を提供したり、調整を行ったりしています。また、青少年や保護者、教育者やボランティア団体、政府機関ばかりではなく、薬物乱用のない人生を送ることに関心のある人なら誰とでも協力しています。

真実を知ってください：薬物

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズには、マリファナ、アルコール乱用、エクスタシー、コカイン、クラック・コカイン、覚せい剤、有機溶剤・吸入ガス、ヘロイン、LSD、処方薬乱用についての正確な情報がまとめられており、読者が自分の意志で薬物のない人生を送ることができるように役立つ内容になっています。

さらに情報を知りたい方、またはこの小冊子シリーズのいずれかをさらに何部かご希望の方は、下記までご連絡ください。



Foundation for a Drug-Free World
1626 N. Wilcox Avenue, #1297
Los Angeles, CA 90028 USA
drugfreeworld.org
info@drugfreeworld.org
1-818-952-5260

薬物のない世界のための財団
日本支部
〒170-0001 東京都豊島区
西巣鴨1-17-5
パークホームズ西巣鴨308
TEL: 03-5394-0284
Eメール: info@drugfreeworld.jp
drugfreeworld.jp